

山野記

サン キ



場所探しもついでに
それとなく
してみたりしている。

つけ義三
三橋乙
菅野修
梶井純
久保隆
梶葉子
出口靖
高野慎三

つけ義三
三橋乙
菅野修
梶井純
久保隆
梶葉子
出口靖
高野慎三

風景とくらし義書



山野記 つげ義春編

著者 つげ義春・三橋乙擲・梶井 純・

菅野 修・久保 隆・梶 葉子・

出口 靖・高野慎三

発行日 一九八九年十月二五日

発行所 北冬書房

東京都目黒区大橋一の四の一〇

電話（四六一）六二八八

定 価 一八〇〇円（本体一七四八円）

製本所 鳴原製本

電話（二〇三）三八五〇

山野記

つげ義春 編



目次



秋山村逃亡行 つげ義春
—
6

乱舞する螢の群れ 三橋乙擲
—
36

古董旅日記 梶井純
—
68

金の夢・金の牛 菅野修
—
88

高遠行 久保隆
—
108

夢の帰っていく場所 梶葉子
—
130

五浦・湯の網紀行 出口靖
—
156

桔梗ヶ原を越えて 高野慎三
—
170

秋山村逃亡行／つげ義春

山奥でひっそり独居することをこの数年来夢想していて、近ごろ旅に出ると隠棲するにふさわしい場所探しもついでにそれとなくしてみたりしている。

一 昨年、秋、山梨県の東のはずれ、最も東京に近い秋山村の富岡という所へ二度行つた。二度ともついでに寄つただけなので泊ることはしなかったが、その景色みて同行者は、「凄い所ですね、これは日本のチベットですよ」と驚いていた。チベットは大仰にしても、山ばかりの山梨県に住んでいる同行者がそう云うほど秘境じみて暗く淋しい印象で、私はこういう所こそこもって棲むにふさわしいのではないかと思つた。

秋山村は深い溪谷の秋山川に沿つて下流から上流まで一本道に小さな集落が点在する細長い村で、二度行つた富岡は下流の方に位置しているが、上流へ行けば行くほど險阻で物淋しくなるのが谷筋の例で、私はずっと上流の方も見たくなり、今年の冬出かけてみた。

中央線の八王子から五つめの上野原に下車し、上流の方に宿屋があるか人に尋ねようとする。駅前にはタクシーの運転手しかおらず「手前の富岡に二軒、奥の方では中野にたしか一軒あったな」と教えてくれた。中野には村役場がある、私はとりあえずそこまで行ってみようと思った。すると運転手は無線で営業所へ問い合わせを頼み、折返し返事が来て、梅屋という宿屋があるが、家人がこれから用事で出かけてしまうので泊れないと云った。そしてまた営業所へ他を探してくれと頼んだ。私はただ宿屋の所在を尋ねただけで、バスで行くつもりでいたが、手数をかけたのでタクシーに乗らざるをえなくなった。バスは朝夕四本しかなく、歩いてはともに行けませんやと運転手は云った。

駅から見える桂川の橋を渡ると、タクシーはぐんぐん坂を登って行った。間もなくトンネルが現われ、そこが秋山村の入口で、トンネルが境界というのは、ふだんこちらからは見ることのできぬ未知の世界が待ちうけているように緊張を覚える。トンネルを抜けると田野入という小さな集落がある。その先で道は二岐に分かれ、右へ曲ると山の隙間を縫うような暗い木立ちに視界を閉ざされた道が続き、また桜井隧道という長いトンネルが現われる。それを抜け急な坂を下ると秋山川にぶつかり、そこで視界はパッと開け、山梨の同行者が「チベットだ」と叫んだほど景色は一変する。

展けた景色なのに秘境のように映ったのは、途中の暗い道とトンネルを抜け出て、不意を衝かれるからだろうが、私は、ジャングルに迷い洞穴を抜けると前世紀の恐竜の世界が展開される昔見た冒険映画のシーンが想起されたりして、人跡未踏の地に踏みこんだような気さえた。目のくらむほど深い秋山川の対岸の左手の方に富岡の集落が夕霞の崖上に浮かんで見えた。

この富岡へ二度めに来たときは、やはり山梨からの同行者の運転する車で、十数人の仲間と田野入の二岐を左の道へ行った。左には日向、奥牧野、一古沢、そして富岡と集落が続くのでバスが通っているのだが、右の桜井隧道の方より道はかえって険しく蛇行している。私は仲間に秋山村の景色を見せてやりたく、皆で旅行の帰途にちよつと寄り道をしたのだが、日も暮れ雨も降って夕闇に包まれた景色は、仲間の目にもそうとうな僻地に映ったようだった。

しかし景色の印象は、こちらの心持だけでなく、天候や時刻によっても変る。今度の秋山村行きは上天気だったせいか、タクシーが桜井隧道を抜け、感動的に開ける景色に私は身構えたりしていたのに、富岡あたりの景色は明るく、のんびりした山村見るようで、前とはだいふ違って見えた。轟々と谷を震わせていた秋山川の水量も小川のように少いのは

乾季だからだろうか。

タクシーの営業所から、中野に別に宿屋をみつけ予約をしたとまた連絡があったので、タクシーは秋山川の上流へ向かった。桜井、古福志、小和田、神野と、S字の崖道はカーブを曲るたび往来に面した小さな集落をみせて、私はふり返り見て行つた。道幅は広く立派に舗装され、ガードレールも切目なく整備され、上流へ行くほど谷合いは明るくなっていった。バスなら小一時間かかるところが、タクシーは二十分足らずで中野に着いた。なにか呆気ない気がされた。

山峡の奥の暗さを想像していた中野には、鉄筋の立派な役場があった。すぐ横のこのあたりでは谷も浅くなった川岸には、やはりコンクリート三階建ての病院があった。私は初めて富岡まで来たとき、その話を友人にしたら、旅好きの友人の蔵書に戦前発行の『山村巡礼』という紀行本があり、そこに秋山村が紹介されていて、そのコピーを送ってくれた。その同じ本を私も間もなく古書で入手したが、そこには、秋山村は山梨県一の貧乏村とされているので、時代の推移はあるにせよ、立派な病院見て意外に思えた。

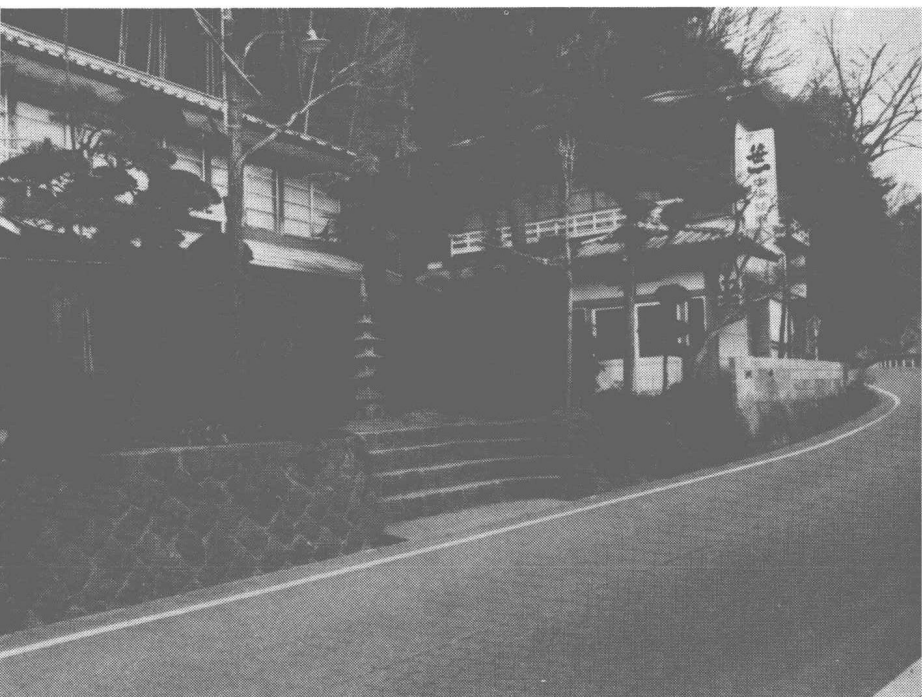
その役場と病院のすぐそばに、往来に面して予約しておいた宿屋があった。木造の古びた旅籠屋風の宿屋で、玄関のガラス戸開けると、煙草ケースが置かれ煙草を売っていた。

閉め切った家の中で煙草販売しているのは初めて見た。

六十前後のおかみさんが玄関の横の縁側の方に出て来て、私も縁側に腰かけて挨拶して、仕事で来たと云った。タクシーの運転手は、もう一軒の方を家人が留守になるといつて断わられたのは、一人客だからだろうと先ほど云っていた。一人客が観光地でもない所に用もなくふらふら来て怪しまれては困るので、それで私は、写真を撮って文章を書いたりする職業で、仕事で来たことを強調し安心させた。静かで好い村ですなと、お世辞も出している、背後を洗濯物を抱えた若い娘さんが通り、ちょこつと挨拶した。都会風の化粧した美しい娘さんで、それがどうだということもないが、私は好い宿に泊まることができたと思った。

部屋には上がらず、私はそのまますぐ写真を撮りに往来へ出た。おかみさんは、土木工事の人たちが泊っていて五時に戻ってくるからその前に入浴できるようお帰りなさいと云った。

中野から先には栗谷、板崎、寺下、無生野と、いくつか集落が続く、最奥の無生野から先は、雛鶴峠を越え都留市に道は通じている。私はそちらの方を先に見ておくべきだったのに、うっかりしてタクシーで通って来た下流の方へ歩き出し、あとになって上流の方を



中野の宿屋

見る機会を逸した。

車の通行の少い、人にはまったく会わない道を神野へ向かって行くと、崖下の斜面に五、六坪の同型同大の小さな家が四戸固ってあった。無人のようなので崖をおりて見ると、別荘というには粗末な家で庭もなく、表札代りに貼ってあるはげた名刺を見ると八王子市と読めた。シーズンになると泊りにくるのだろう。私は隠棲の方法を具体的にいくつか練ってみて、それが現実離れしているのが自分にも分っているので、このような別荘暮しが結局は手取早いのもかもしれないと思った。しかし都会の建売住宅のように両隣りくつき合っているのは独居の意味がない。

神野には巨きな中学校があった。タクシーで来るとき見た桜井の小学校も立派で、どちらも鉄筋コンクリート。神野の中学校の向いの丘の上にはゴルフ場もあるらしく、秋山村カントリークラブの看板が見えた。神野を過ぎ、小和田の集落に来ると、そこにも丘の上にYLO会館という白いビルが立っていた。半世紀も前の『山村巡礼』読んで、田舎のここだからさほどの変化はないだろうと、読んだままのイメージで私はいたが、県下一の寒村もいつか栄えたのかと思った。集落の家構えもゆったり大きく、田舎じみたワラ葺きの家は探してもない。地形は谷筋であっても、道も集落も谷の上に位置しているので、谷底

のような暗さもなく、集落ごとに田畑を作る広がりもある。小和田にはまた十戸ほど赤青ハデな色の小つぶのバンガローが対岸に見えた。

私は山居をしても子供には会いたかったので、子供が一人で訪ねてこれる距離を考えて、奥多摩や丹沢など近い所を候補にあげていたが、行楽地では気も散るので、近いわりに辺鄙な秋山村が格好の地ではないかと期待をよせていた。それが案に相違してバンガローやゴルフ場、いたる所入漁料徴収の立札などもあって釣人も多いようで、シーズンの賑い想像されて、私はいくらか気落ちするのを覚えた。今はどんな山奥でも道は舗装されて、僻地も秘境もなくなりましたよ、と云った友人のことばが思い出された。

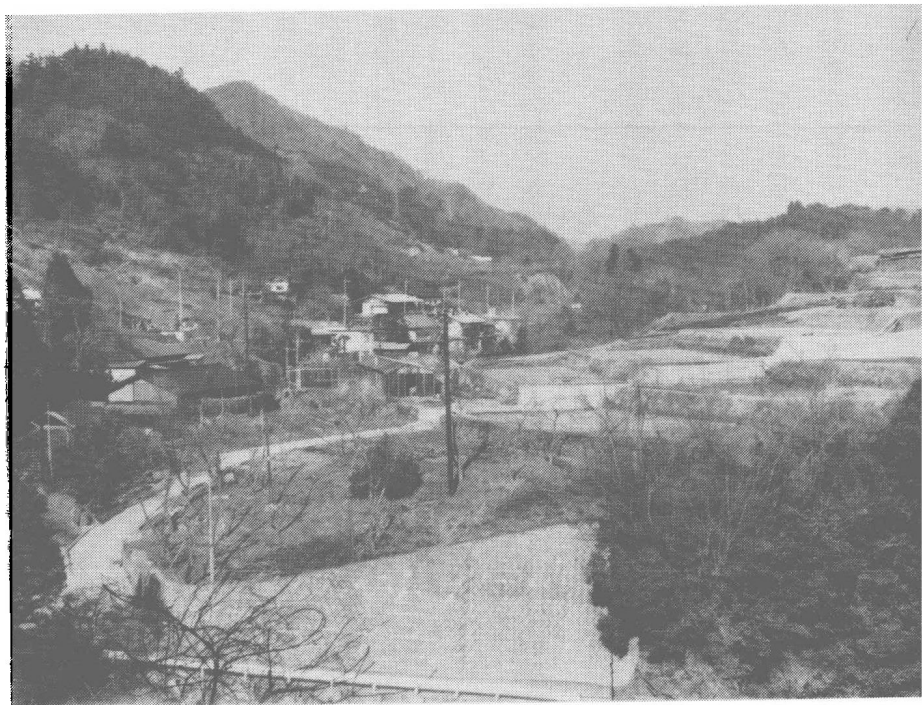
ときどき地図をとり出して、老眼鏡で見て、景色を確認しながら歩いた。「二坪図書館」と書いた小さな立札を二カ所で見たと書いたとはどんな図書館なのか、どんな本が読まれているのか興味を持ったが、立札だけでどこにそれがあるのか分らなかった。多分私設のもので、ふつうの家のひと間を利用しているのかもしれない。私がもし、この村に住むようなことでもあれば、私も一坪図書館開設しようかしらなどと思った。

いつか親しい友人が、田舎でマンガ美術館を創設する案を出したことがあった。娯楽本位でない、ということはマイナーなマンガ家の原画や稀覯本を展示し、信濃デッサン館の

ようにコーヒーをのませたりして、私はその館長におさまって「それで老後の暮しは保証されますよ」という話だった。それをこの村でやったらどうだろうかと、フトその話を思い出したりした。一坪マンガ館とか云って…。

そんな佗しいことを考えながら、小和田から大きなカーブを曲り、下流になるほど谷の深くなる道を、いつの間にか古福志まで来た。古福志から先は桜井と富岡で、あまり先に行ってしまうては宿に戻るのが億劫になるので、道端の自動販売機で罐コーヒーを買い、谷の崖をおりて行つてひと休みした。古福志、桜井、富岡にかけては谷は最も深くなり崖上からは見えぬほどだが、奥多摩のような岩壁や巨石や淀などはみられず、小石ばかりの川底は案外平凡な谷に見えた。

日の蔭った谷底で、私はコーヒーをのみ煙草を吸い、少時ひそりとした孤独感を味わった。そしてここまで来た思い出に自分を写真に撮ったりした。セルフタイマーをかけ、画面から自分が見えぬようカメラを遠くに置き、ピントを合わせておいた腰をかける岩まで走つて、小石につまずいてコケそうになり、一枚めは失敗をした。独りで苦笑いも出て、二枚めで成功したようで、そのあとそのへんで小便して、もと来た道の中野へ戻つて行つた。



明るく展けた神野付近